

徳川家 と 偕楽園

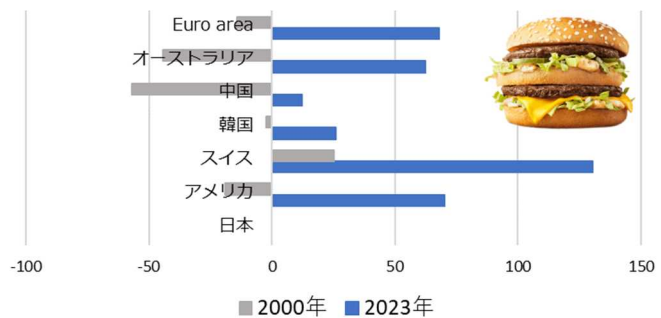
「龍馬伝」(福山雅治、2010年)以来、主演・松本潤というミーハーな理由で久しぶりに視聴している今年のNHK大河ドラマ「**どうする家康**」。脚本は「ALWAYS 三丁目の夕日」やTVドラマ「リーガル・ハイ」「コンフィデンスマンJP」などを手掛けた吉沢良太氏ですので、史実を良い意味でイジりながら歴史上の人物の個性までも妄想させてくれる、コメディ色の強い大河になっています。そんな弱小国・三河の主により成し遂げられた天下統一と江戸幕府の始まりは、その後の庶民の生活や文化にも大きく影響したことでしょう。江戸時代には岡山の後楽園(1700年頃完成)、金沢の兼六園(1600年代から築庭され1822年に兼六園と命名)、水戸の偕楽園(1842年造園)という、いわゆる“日本三名園”が作られています。なかでも偕楽園は水戸藩九代藩主・徳川斉昭(最後の将軍・慶喜の実父)の「領内の民と偕(とも)に楽しむ場としたい」という願いとともに、数千株の梅の木が植えられたことで梅の名所(写真)となり、長らく庶民のために開放されてきました(茨城県民は無料で入園可能)。ただ、残念なことに、2019年11月からは“観梅期間は茨城県民も有料”となっております。



ビッグマック指数 と 牛乳の価格

近年、世界的にインフレ(物価高騰)の拡大が加速しています。特に、2022年はロシアによるウクライナ侵攻や急激な円安の進行もあり、私たちの日常生活にも大きな影響を及ぼしています。物価は上がっているのに日本人の給料はしばらく上がっていないとよく言われますが、それは「**ビッグマック指数(BMI)**」からも読み取れます。BMIはイギリスの経済専門誌『エコノミスト』によって1986年に考案されて以来、同誌で毎年1月と7月の2回公表されている指数(<https://www.economist.com/big-mac-index>)ですが、世界中のマクドナルドで販売されているビッグマックは、各国ではほぼ同品質で販売されていて、原材料費や店舗の光熱費などのあらゆる要因を元に単価が決定されるため、その国の総合的な通貨の購買力を比較するのにふさわしいと考えられています。2000年当時、日本のビッグマックの価格は294円で、アメリカは2.51ドル、為替相場は約106円でしたから、アメリカで食べるビッグマックは日本円で266円だったことになります

ビッグマック指数% (日本円ベース)



(日本のBMIランキングは5位でアメリカは8位、日本円ベースのindexではアメリカは-19.2%)。しかし、日本のBMIは年々低下していき、2023年1月発表の最新版では、日本で410円(その後450円に再値上げ)なのに対しアメリカでは697円(+70.1%、6位)、スイスではなんと944円(+130.3%、1位)となっ

ており、日本のBMIランキングは54カ国中41位となっています。いまや中国や韓国の方が高く、日本のビッグマック価格は先進国としては破格の安さとなっています。これだけ見れば他の国よりも物価の上がり方が緩やかでいいんじゃないかと思えますが、1個のビッグマックを購入するのに必要な労働時間をもとに物価に比した賃金水準を推計すると、ビッグマックの価格が安い国は賃金も安いことになり、日本の労働力は世界的に見ても安くなっていることが示唆されます。

一方、牛乳の各国での基準販売価格にも大きな差異があるようです。少し古い2018年のデータになりますが、牛乳1リットルあたりの価格は、日本で208円であるのに対し、アメリカ 127円、チェコ 90円とかなり安い国もあれば、台湾 335円、香港 428円と非常に高い国もあります（総務省統計局 小売物価統計調査）。牛乳に関してはそれぞれの国の酪農事情が異なると思いますので一概には言えませんが、日本では2023年1月平均で232円と上がっており、こちらもインフレの影響を大きく受けているようです。

観梅もファストフードも、生活必需品もすべて値上げ。鎖国時代にはなかった、“超・グローバル時代”の宿命でしょうか……。さて、ニッサンメールマガジン第190号をお届けします。(O)

生乳生産における飼料費について

先述の通りですが、昨今の情勢を受けてこの数年で国内の牛乳の価格は上昇しており、スーパーでもそれは日々実感するところです。そんな中、非常に耳の痛い話にはなりますが、今回は酪農のお金にまつわる話題を紹介いたします。



図1

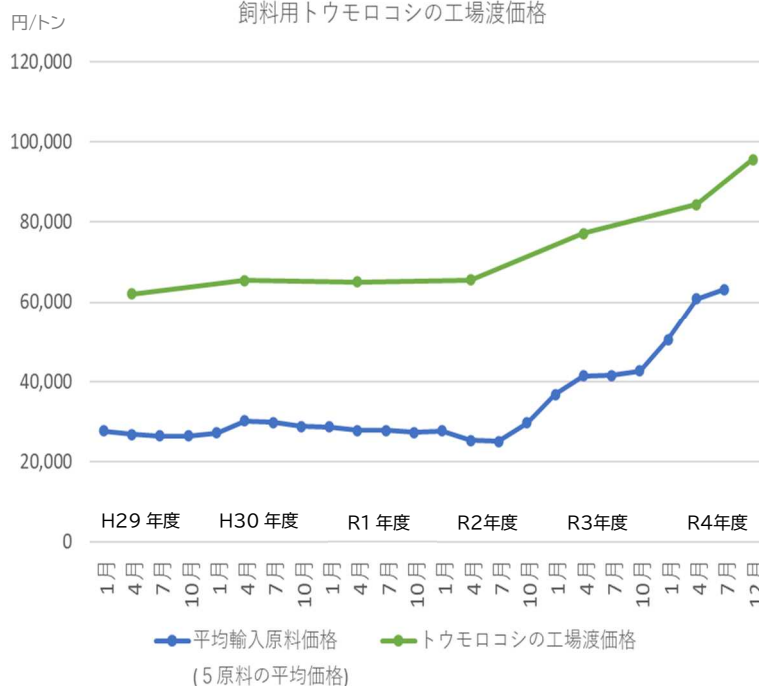
コロナ禍やウクライナ情勢の影響で、穀物価格や肥飼料価格が上昇しているのは周知の通りですが、実際に酪農経営へどのように影響しているのかについて、経費の面から見ていきます。毎年公開されている農林水産統計によると、生乳を生産するための経費のうち、物財費が全体の80%を占めていますが（図1）、経費として真っ先に思い浮かぶ、飼料費、光熱費、診療費などは、この物財費に含まれています。

物財費の中でも全体の半分近くを“飼料費”が占めていますが、令和3年度は前年度比で7.7%増加しており、生乳100kg当たりの飼料費としては300円ほど高くなっています。

次に、飼料費に直結する、飼料の主原料価格の推移を見ていきます。図2の青線は、5原料（とうもろこし、ごうりゃん、大豆油かす、大麦、小麦）の平均輸入価格の推移になりますが、令和2年度から上昇の一途となっています。飼料用トウモロコシの工場渡価格の推移（同・緑線）も同じように令和2年度から急騰し、令和4年12月には5年前のおよそ1.5倍となっており、令和4年度の生乳生産費はさらに上昇しているものと思われます。日本の濃厚飼料の自給率は12~13%程度であるため、飼料費は主要原料の輸入価格に大きく影響を受けてしまうのが現状です。

このように生乳生産費の多くを占める飼料費ですので、目にとまりやすく、コストを抑えるためにまず手を加える部分になりがちです。しかし、畜産は生き物相手であるため、飼料や微量栄養素の過度な削減は、家畜の健全な機能を損ないかねません。乳牛の場合、泌乳期のケトーシスに始まり、繁殖成績の低下や、乳房炎などの疾病の増加に繋がれば、削減した飼料費以上に診療費などの出費が増えてしまう可能性もありますから、飼料の中で要・不要の選択をし、最適な設計で給与する事が求められています。生乳の生産抑制もある中で、実際の酪農を取り巻く環境は数字が示している以上に厳しいものとなっていると思われまます。厳しい情勢がしばらく続きますが、飼料ロスを減らした、より最適な飼養管理が必要となります。(T)

図2 平均輸入原料価格(5原料の平均価格)
飼料用トウモロコシの工場渡価格



お知らせ

酪農・豆知識（第132号）の概要および URL

牛の子宮捻転は難産の原因の一つであり、発見や治療の遅れにより胎子の死亡や母牛の予後不良につながります。近年、難産における子宮捻転の割合が高まっていることから、酪農・豆知識では3回（第132号、133号、134号）にわたり、乳牛における子宮捻転の発症メカニズムを整理し、その発生要因や予防策ならびに整復にあたっての注意点について紹介していきます。

「酪農・豆知識」は、[当社のウェブサイト](#)のトップページにある「技術情報」をクリックし、「酪農・豆知識」のページに入るとご覧になれます。ぜひご利用ください。

印刷用の PDF ファイル

印刷用に PDF ファイルを添付しました。PDF ファイルをご利用いただくためには、Adobe Reader が必要です。お持ちでない場合、[こちらからダウンロードし、インストールしてご利用ください。](#)

メールマガジンへの登録・ご質問等

メールマガジンの配信の停止や登録内容の変更、お問い合わせ、ご意見・ご要望等々は[当社のウェブサイト](#)のトップページにある「お問い合わせ」のページをご利用ください。

アドレス変更をお忘れなく

人事異動、転退職等でメールアドレスが変更になった場合で、引き続き日産合成工業株式会社のメールマガジンの配信を希望される方は、旧アドレスと新アドレス及び新所属等を[当社のウェブサイト](#)のトップページにある「お問い合わせ」のページを利用してお知らせください。配信できなくなったアドレスは、メーリングリストから自動的に削除しておりますので、よろしくお願いします。

QRコード

QRコードから、[当社のウェブサイト](#)のトップページにアクセスできます。

